



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	変化と多様の町並み色彩形成のしくみ : 函館市西部地区のペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりから
Author(s)	森下, 満; 柳田, 良造; 野口, 孝博
Citation	日本建築学会計画系論文集, 592, 139-145
Issue Date	2005-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37288
Rights	日本建築学会
Type	journal article
File Information	110004849665.pdf



変化と多様の町並み色彩形成のしくみ

—函館市西部地区のペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりから—

FORMATION MECHANISM OF COLOR OF TOWNSCAPE HAS A HARMONY
IN THE CHARACTERISTICS OF CHANGE AND DIVERSITY—Study of the relationship between paint colors and residents' life
at the West Historic Quarter in Hakodate—

森下 満*, 柳田良造**, 野口孝博***

Mitsuru MORISHITA, Ryozo YANAGIDA and Takahiro NOGUCHI

At the West Historic Quarter in Hakodate, the color of the townscape has been keeping a harmony though many western style houses have been used various paint colors and their color has often changed. This study aims to clarify the formation mechanism of this color of the townscape. As a result, we found that many residents have selected the color considering the relationship among of them, their houses and surrounding environment. In the background, there were several characteristics of the western style houses with ornaments, the port city, symbolic historical buildings, etc., in the quarter, where the interaction between paint colors and residents' life has occurred. And residents have understood and felt strong attachment for the characteristics through their houses painting.

Keywords: townscape, color, paint, resident, West Historic Quarter in Hakodate

町並み、色彩、ペンキ、住民、函館市西部地区

1. はじめに

下見板張り洋風建物のペンキ塗装によって形成されている函館市西部地区の町並みは、外壁をブルーグレー、窓枠・柱型等を黄色のあざやかな色と配色をもつ重要文化財・旧函館区公会堂（1910(明治43)年建設）をはじめとして、一般の住宅地などではあまり使われることのないピンク色系や緑色系の色彩を中心に、様々の色で構成されているが、それが混乱を招くことなく、一定の調和をたもち、独自の個性をもつという特徴を有している。

筆者らは前稿^{*1)}において、この西部地区の明治初期から現在までの1世紀以上にわたる町並みの色彩の変容過程を、建物の維持管理行為であるペンキの塗り替えをつうじて分析した。その結果、個々の建物では5年から10年の周期で異なる色のペンキが塗装され、町並み全体としては20年から30年の周期で色彩が時代とともに変わってきていること、大火や戦争による色の選択の不自由な時代もあったが、そういうことのない平時では建物所有者の好みによる色の自由な選択行為などにより多色の町並みが形成され、さらには多色の中にも住宅地のピンク色や港湾地区の緑色というエリアごとの特徴的な色があること、等をあきらかにした。

このように歴史的に形成されてきた西部地区の町並み色彩の特徴は、第一に、同じ色のペンキを塗り続けるのではなく異なる色を用いる周期的な「変化」にある。第二に、ある一定の狭いエリアでは

特定の色が支配的な場合もあるが、地区全体として同系色で統一されているのではなく、異なる様々の色で構成され、それが一定の調和をたもっている「多様」さにある。

この函館市西部地区における町並み色彩の変化と多様は、日本の伝統的な町並みの大多数が建物の木や漆喰といった外壁材で形成され、その統一的な素材の色と、それが変わることなく継承されることで町並みの特質が維持されるというものとは異なるものである。また、現代の町並みにおいて、色彩コントロールの有力な手法の一つとして、同系色による統一や渋い色による統一があげられるが^{*2)}、西部地区の個性的な多様とその中での調和の事例は、これとは異なる手法の可能性を示唆するものであるといえよう。

2. 研究の目的と方法

2-1. 研究の目的

本稿は、このように変化と多様を特質とする函館市西部地区の町並み色彩において、その特質の基底にあるものとしてペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりに着目し、それを生活の視点から見直し^{*3)}、住民にとっての町並み色彩の意味をとらえること、また住民の暮らしとのかかわりの中で町並み色彩がどのように形成されてきたかを分析し、変化と多様の中で一定の調和をたもつ町並み色彩形成のしくみをあきらかにすることを目的とする。

* 北海道大学大学院工学研究科 助手

** ブラハアソシエイツ(株) 代表取締役・工修

*** 北海道大学大学院工学研究科 教授・工博

Research Assoc., Graduate School of Engineering, Hokkaido University
President, Praha Associates Inc., M. Eng.
Prof., Graduate School of Engineering, Hokkaido University, Dr. Eng.

2-2. 研究の方法

ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりを次の2点からとらえる。第一に、時層色環^{注1)}から得られた自分の建物のかつてのペンキ色彩、および周囲の環境のペンキ色彩に対する住民の記憶、思い出の分析をおこない、住民が色彩とどのような営みをしてきたのかをあきらかにする。第二に、ペンキを塗り替える時に、誰がどのような考え方と方法で色彩を選択したのか、色彩選択の意志決定の主体、方法と決定要因を分析し、色彩形成への住民等の関与の仕方や周辺環境の影響等をあきらかにする。これらは、社会学におけるライフヒストリー研究の方法を参考にしている^{文4) 文5)}。

調査は、建物所有者に対して時層色環の写真と、時層色環から得られたペンキ各層の色彩を、色見本を用いて古い方から新しい方へと順番に並べたものを見せて、ヒアリングをおこなった^{注2)} (1990年6月～9月にかけて調査実施、西部地区の弁天町、大町、末広町、弥生町、元町、船見町の6町を対象とした悉皆調査82棟中62棟で有効回答)。この調査方法は、言葉だけでかつての色の記憶を問う一般的なヒアリング調査とは異なり、時層色環から得られたかつての色を具体的かつ視覚的に提示するという点に特徴がある。ヒアリングの項目は、時層色環から得られた色についての記憶、色の塗り替え時期とその契機、塗り替え回数、色彩選択のポイント、周辺の建物・町並み・船舶の色とそれらとのかかわり、塗装を依頼した業者について、などである。

3. 住民の記憶の中にある町並み色彩

各建物からこすり出しによって採集された時層色環を住民に提示し、その色の記憶に関するヒアリングをおこなったことにより、住民にとって自分の建物にかつて塗られていた色彩が提示された結果、それが住民の意識に働きかけ、記憶を呼び起こし、住民は様々な生活の歴史を通してペンキ色彩のことを語り出した。

3-1. 自分の建物のペンキ色彩に関する住民の記憶

住民の自分の建物についての記憶は、家族の生活史の節日や社会的出来事を手がかりに思い出されるものであろう。函館でのヒアリングでもそうである。それに加えて、その記憶の中に色彩にまつわる具体的なエピソードが語られていることが西部地区の特徴である。色彩のエピソードを含む住民の建物の記憶は、表1のように、建物自体の変化、建物にまつわる社会的出来事、建物にまつわる暮らしの思い出の3つに分類できる。

その具体的内容として第一に、建物の改築や用途の変更のような建物自体の変化とペンキの塗り替えの関係があげられている(10例)。

「10年前に前面外壁を改築(サイディング)。その時現在の塗装をした。色

については白が流行していたので、それを用いた。柱型の色については屋根の色彩(茶色)とあわせた。」(Ry 堂、1907(明治42)年建設、弁天町)、「昭和38年まで経営していた菓子店(奥さんがその娘)を閉店し、1階を改築。その時に水色っぽい色を塗装した。その10年後に外壁を張り替え、同時にアルミサッシをつけた。その際、ベージュのペンキを塗装した。」(Sa 家住宅、1918(大正7)年建設、大町)

建物の老朽化や用途変更にともない外壁の張り替え等の改築がおこなわれ、それと同時にペンキも塗り替えられ、以前と違う色に変えられたペンキが鮮明に思い起こされている。前者の事例では、外壁にはその時の町並みの流行色である白色を取り入れ、柱型は洋風建物の意匠の特徴を考慮して外壁とは異なる色としながらも、建物全体の調和を考えて屋根と同じ茶色を用いている。

建物にまつわる社会的な出来事とペンキ色彩の関係についての記憶は2例あげられている。

「大正12年の大火によって前面外壁のペンキ塗装が、その熱によって膨れあがったために塗り替えたのを覚えている。その頃、周囲の建物もペンキは塗っていたように思う。」(Na 呉服店、1907(明治40)年建設、末広町)、「戦時中から戦後20年代までは屋根、外壁にイカの油を塗っていた。」(Fu 米穀店、1917(大正6)年建設、末広町)

西部地区は1878(明治11)年から1934(昭和9)年までに幾度となく大火のあったところであるが^{注3)}、その大火によってペンキ塗装が傷んだため補修をおこなった自分の建物へのつらい記憶と共に、周辺のペンキ塗装に関する記憶も語られている。また戦中、戦後の時代に、イカの油が塗装されていたことがあげられている。イカ漁は当時も今も函館の主産業であるが、そのイカの油が戦中、戦後のペンキが不足していた時代に代替物として塗装されていたことは函館ならではのエピソードであり、この建物だけでなく、多くの建物で使用されていた可能性がある。

建物にまつわる暮らしの思い出とペンキ色彩の記憶は21例と多い。そのうちの一つは、入居時の思い出(12例)である。

「祖父が小学生の頃に建てられ、入居した。その時はうすい黄色で、当時家主だったKo氏が、近隣のKu家住宅、Ha家住宅等所有する建物をまとめて塗っていた。」(Ki 商店、1913(大正2)年建設、大町)

それまで生活を営んでいた建物から現在の建物へ移り住むことによって、その時の状況が建物の家主等とともに色彩でも印象づけられている。この事例では自分の建物だけでなく、近隣の数軒の建物をも含むペンキ色彩の思い出が、半世紀以上も前のエピソードとして祖父から孫へ語り継がれている。二つ目は、家族の生活史に関するもの(6例)で、奥さんの嫁入りの時(4例)や自分が子どもの頃の色の記憶(2例)である。

「昭和36、7年に奥さんがお嫁にきたのをきっかけに、それまでのいたんでいた塗装を塗り替え、白っぽい色として水色を選び、自分で塗装した。」(Ta 家住宅、1932(昭和7)年建設、大町)

この建物の時層色環分析による色彩変容データ票^{注4)}(以下、「時層色環データ票」)によれば、それまでは暗緑色であったが、パステル調の水色に塗り替えられている。濃い目の暗い色から淡く、明るい色への変化は、結婚という家族の重要なライフステージをむかえる喜びや希望が反映されているように思われる。

「遺愛幼稚園に私が通っていた頃(大正14から昭和2年頃(1925-1927年頃))は、茶色っぽかったように思う。」(遺愛幼稚園、1913(大正2)年建設、元町)遺愛幼稚園はミッション系の私立幼稚園で、歴史も古く、現在伝統的建造物に指定され、地区を代表するランドマーク的存在であるが、

表1 自分の建物のペンキ色彩に関する住民の記憶

色彩から呼び起こされた記憶の内容		該当数
建物自体の変化	建物の改築や用途の変更に伴うペンキの塗り替え	10
建物にまつわる社会的出来事	大火によるペンキ塗装の傷みとその補修	1
	戦争時のペンキの不足とその代替物	1
建物にまつわる暮らしの思い出	入居時の思い出とその時の色	12
	家族の生活史と色	6
	ペンキ色彩に対する評判	2
	塗り替え時の予期せぬ出来事による予定外の色への変更	1
合計:		33

子供心にその色が鮮烈で、記憶に深く刻み込まれたことを示している。三つ目は、わが家のペンキの色が当時としては珍しく、職場の同僚や近所の人々の評判になったこと（2例）があげられている。

「昭和40年頃、以前に住んでいた所の向かいにあった塗装店に頼みグリーンを塗装。色の選択などについては主人がおこなったが、田舎臭い雰囲気が出て奥さんは嫌だった。しかし主人の勤めていたドックの同僚には評判がよかった。同時期、周囲でグリーンを使っているような建物はなかった。」(Fu家住宅、1947(昭和22)年建設、大町)

この住民にとって当時、家のまわりに緑色は少なく、自慢の一つであり、またそれを誇りに思い、深く印象づけられた色であったことがうかがえる。四つ目は、ささやかなエピソードではあるが、塗り替え時の予期せぬ出来事により、やむをえず予定外の色へ変更した思い出（1例）があげられている。

「現在の塗装は6、7年前におこなった。その際はグレーの外壁に紺の塗り分けを予定していたのだが、塗装屋がペンキ缶1つ忘れたためにその色がつかず、グリーン系の色彩になった。」(Ha商店所有建物、1916(大正5)年建設、弁天町)

緑系の色はピンク色と並ぶ地区の特徴的な色の一つであり、予定外の色ではあるが、町並みに調和するという判断があったのではないと思われる。

3-2. 周囲の環境のペンキ色彩に関する住民の記憶

住民のペンキ色彩に関する記憶、思い出は、周囲の環境についてもあげられており、ペンキ色彩への関心が自分の建物だけにとどまらず、周辺へと広がりをみせていることがわかる(表2)。その第一は、港町特有の環境にかかわるもので、船舶のペンキ塗装とそれの建物への影響に関する記憶である（5例）。

「戦後は緑の建物はよくあったが、建物用のペンキを使っていたのは金のある所で、一般の民家などでは船舶用の緑のペンキを転用していたところもあった。」(Ta湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)

これは、船舶用のペンキを建物に使用していた記憶（2例）の一例であるが、これ以外にも船舶のデッキによく使われていた緑色が建物にも影響していたこと（2例）、船舶塗装業者が建物の塗装もおこなっていたこと（1例）など、船舶のペンキ塗装がいろいろなかたちで建物に影響を与えていたという記憶があげられている。

第二に、地区に関する社会的な出来事との関係（11例）があげられている。一つは大火とペンキ塗装の関係である。

「大火が頻繁にあった頃、焼けてしまう時は焼けるのだからとペンキの塗装はされていなかった。」(Ta湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)

前述のとおり、西部地区では戦前までに多くの大火があったが、当時ペンキが高価で一般化していなかったこと^(注5)に加えて、大火が住民にペンキ塗装への消極的な姿勢をもたらし、未塗装の建物があったこと（3例）があげられている。また第二次世界大戦中に、ペンキ色彩による偽装、迷彩が施されていたこと^(注6)があげられている(8例)。

「戦時中は重要な建物のみ偽装をし、グレーが多かったが、黒や茶、緑でまだら模様になっているものもあった。」(Ku家所有住宅、1914(大正3)年建設、

大町)、「弥生小学校は縦に黒と灰のすじを入れ、迷彩塗装を戦時中におこなっていた。」(On家住宅、1930(昭和5)年建設、弁天町)

グレーなどの具体的な迷彩色から、とくに現在地区の景観形成指定建築物の弥生小学校（1938(昭和13)年建設、弥生町）における縞模様という迷彩の仕方まで、戦時中の生々しい体験が色彩の記憶を通じて語られている。

3-3. 戦後の特徴的なピンク色と緑色に関する住民の記憶

前稿であきらかにしたように、戦後の多色の町並みの中で特徴的な色彩として、淡く、明るく、柔らかなパステル調のピンク色と緑色があるが^(注7)、これらの色についての記憶も多くあげられている。ピンク色については(表3)、住民の自分の建物のピンク色に関する記憶が14例あげられており、そのうち1960年代（5例）と1970年代（4例）のピンク色の記憶を多くひろうことができる。

「昭和35年頃、アメリカン・スタイルを意識して下見板部分をピンクと柱等を白く塗った。」(函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)、「昭和45年頃買取り、それまで茶だったのをピンクに塗り替えた。」(Ku家所有建物、1914(大正3)年建設、大町)

前者はアメリカ文化へのあこがれと柱等の白色との塗り分け、後者は建物の買取りを契機に以前の茶色ペンキの塗り替えのエピソードとして、20年から30年前のピンク色が鮮明に記憶されている。

「ピンクについては旧函館区公会堂と遺愛幼稚園の色彩をまねた。」(函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)、「20年くらい前（1970年頃）から近所のOh洋裁学校（現函館文化服装学院）や旧函館区公会堂など、見る限りピンクの建物が多かったの、それをまねた。」(Ka家住宅、1921(大正10)年建設、元町)

旧函館区公会堂、遺愛幼稚園といった地区のランドマーク的な建物がある時期ピンク色に塗られ、それが函館文化服装学院^(注8)などの周囲の建物にまねられていたことがあげられている（3例）。

「(20年ほど前)その時周辺にピンクの建物が多くあり、自身もピンクがよい色だと思ったのでそれを塗装することにした。」(Sa理容院、1921(大正10)年建設、元町・大三坂沿い)、「ピンクを塗った当時、周囲にはペンキを塗っていない建物がほとんどで、函館文化服装学院がピンクになってから次々とまねられていった。Ka家住宅等。」(函館文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町・大三坂沿い)

このピンク色が、地区の代表的な坂の一つである大三坂周辺の多くの建物で用いられるようになったようすもあげられている（4例）。

遺愛幼稚園は、函館市東部地区にある遺愛女学校（現遺愛学院）の付属幼稚園の建物である。この遺愛女学校の本館（1908(明治41)年建設）の時層色環データ票によれば、外壁の色彩は創建当初が濃緑色で、その後茶色他のさまざまな色彩が使われていたが、戦後の1953(昭和28)年頃にピンク色のペンキが塗装され、以降現在まで同じ色が塗り続けられている。遺愛幼稚園の時層色環データ票によれば、1956(昭和31)年頃に本館と同様のピンク色に塗装され、以降現在まで塗り続けられている。旧函館区公会堂は1958(昭和33)年頃に外壁がそれまでの黄土色からピンク色に塗り替えられ、1982(昭和57)年に創建時のブルーグレーに復原されるまで同じピンク色であっ

表2 周囲の環境のペンキ色彩に関する住民の記憶

色彩から呼び起こされた記憶の内容		該当数
港町特有の環境	船舶の塗装の建物への影響	5
地区に関する社会的出来事	1934(昭和9)年までの多発する大火のペンキ塗装への影響	3
	戦争中の色による偽装、迷彩	8
	合計：	16

表3 ピンク色に関する住民の記憶

ピンク色の記憶の内容		該当数
自分の建物のピンク色の記憶		14
地区の代表的建物である旧函館区公会堂や遺愛幼稚園のピンク色とその周囲の建物への波及		3
大三坂周辺のピンク色の連鎖的な流行		4
合計：		21

た^{注9)}。つまり、ピンク色の出現は、戦後の1950年代初頭に東部地区の遺愛女学校本館にピンク色のペンキが塗装されたことを始まりとする。その理由として、戦後の明るいイメージを求める風潮と、ペンキ材料の合成樹脂への変化により淡い中間色を固定できるようになったことがあげられる^{注10)}。このピンク色を女学校のシンボルカラーとして西部地区・元町の付属幼稚園が採用し、その直後の1950年代末頃に旧函館区公会堂が、その採用理由は不明であるが、ピンク色に塗られた。1960年頃に函館文化服装学院の建物がアメリカ文化へのあこがれと、旧函館区公会堂と遺愛幼稚園の色彩をまねてピンク色に塗られ、1960年代から1970年代にかけて、函館文化服装学院が立地する大三坂沿いの数棟に連鎖的にまねられ、広がったと考えられる(図1)。このように、ピンク色のペンキ色彩の出現と広がり方には、戦後の時代精神とペンキ材料の技術革新により使用が可能となり、女学校のシンボルカラーとして採用され、それがあるエリア内の近隣の多くの建物で好まれ、模倣されるという一連のプロセスを読み取ることができる。こういうペンキ色彩の町並みへの広がりと地区的な流行を「隣接波及」と呼ぶことにする。

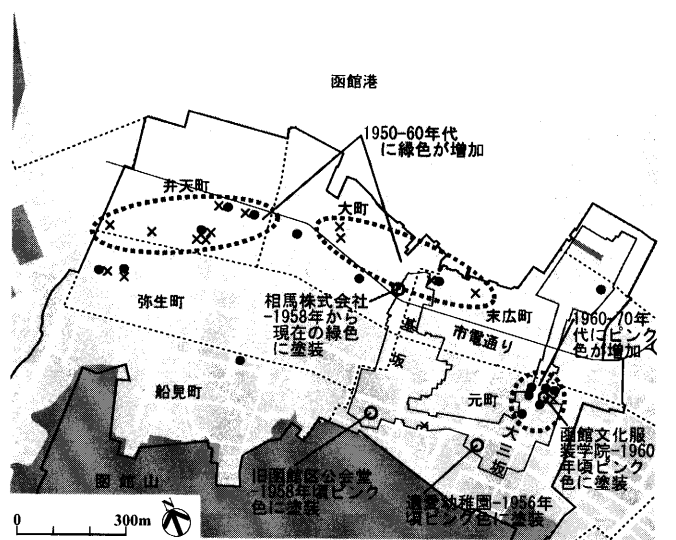
もう一つの緑色については(表4)、住民の自分の建物の緑色に関する記憶が13例、そのうち1950年代(4例)と1960年代(4例)の緑色の記憶を多くひろうことができる。

「戦後になってから、3、4回塗り替えた。7、8年に1度の割合で塗り替えているが、1回目にうすい緑を塗り、以来その色彩をつづけてきた。」(Ok 悦店、1927(昭和2)年建設、弁天町)、「昭和40年頃、以前に住んでいた所の向かいにあった塗装店に頼みグリーンを塗装。」(Fu 家住宅、1947(昭和22)年建設、大町)

7、8年の定期的な塗装間隔で緑色を塗り続けてきたことや、塗装を依頼した前住宅の近所の塗装店とのエピソードとして、30年から40年前の緑色の記憶が語られている。

「30～40年前は相馬株式会社の色をまねて、グリーンを塗っていた。」(Ti 商会、1918(大正7)年建設、弁天町)

この緑色についてもピンク色と同様に、現在伝統的建造物指定の相馬株式会社(1913(大正2)年建設)という地区のランドマーク的な建物が緑色に塗られ、それが周囲の建物にまねられていたことがあ



●はピンク色の記憶を語った住民の建物を、×は緑色の記憶を語った住民の建物を示す。なお、太線で囲まれた区域が調査対象の歴史的景観地域、細線で囲まれた区域は元町末広町伝統的建造物群保存地区、破線は町界を示す。

図1 特徴的な色彩のピンク色と緑色の記憶とそれらの色の増加

表4 緑色に関する住民の記憶

緑色の記憶の内容	該当数
自分の建物の緑色の記憶	13
地区の代表的建物である相馬株式会社の緑色とその周囲の建物への波及	3
船舶の緑色とそれの建物への影響	3
合計	19

げられている(3例)。また、3-2で述べたように、船舶に緑色のペンキが塗装され、その緑色が建物に影響を及ぼしていたこともあげられている(3例)。

相馬株式会社の建物所有者へのヒアリングによれば、昭和30年代から5年ごとに同じ緑色で塗り替えているという。緑色を選んだ理由は不明であるが、時層色環データ票によれば1958(昭和33)年頃から以降ずっと緑色であり、ヒアリングと合致している。図1のように、この相馬株式会社や船舶の塗装の影響を受けて、それらに近い港周辺の弁天町、大町、末広町あたりで、1950年代から1960年代にかけて、緑色もピンク色と同様に隣接波及があったと考えられる。

3-4. 住民の記憶の中にあるペンキ色彩の特徴

ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりは、住民の中に鮮明な記憶として残されていた。ペンキ色彩の記憶は、様々な、具体的な生活のエピソードとして思い出され、語られた(図2)。その多くは建物の改築、住み替え・入居、結婚などの生活の節目となる出来事や、大火や戦争といった社会的出来事などと結びついたもので、ペンキ色彩が住民の暮らしの中で重要な意味をもっていたことがうかがえる。住民の記憶から、洋風建物の特徴や時代の流行色、町並み、港の場所性とかかわりて色彩を選択し、建物を塗装する事例があげられていた。とくに、地区の特徴的な町並み色彩であるピンク色の記憶からは、戦後の時代精神とペンキ材料の技術革新により、ランドマーク的な建物のシンボルカラーとして用いられ、その色があるエリア内において近隣の建物で好まれ、連鎖的に模倣される、隣接波及というしくみによるペンキ色彩の町並みへの広がりと地区的な流行がとらえられた。緑色の記憶からも同様の隣接波及がうかがえた。このようなペンキ色彩と住民の暮らしにかかわる鮮明な記憶

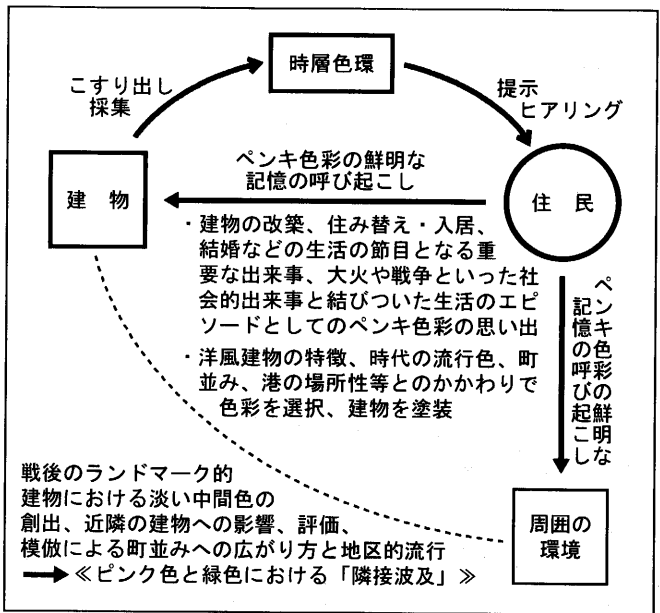


図2 住民の記憶の中にあるペンキ色彩の特徴

は、住民による町並み色彩形成の基盤になっていると考えられる。

4. 色彩選択における意志決定の主体と方法

ペンキの色を選択するにあたり、誰がどのように決めているのか、意志決定の主体と方法には、住民、塗装業者、近隣住民の3者の関係から4つのタイプをとらえることができる。住民が単独で決めている「住民単独」(11例)が最も多く、住民から依頼されて塗装業者が決めている「塗装業者主体」(9例)、住民と塗装業者が相談しながら決めている「住民と塗装業者の対話」(5例)がつづき、近隣の住民同士が相談しながら決めている「住民同士の相談」は1例と少ない。

「主人が昔大工で、またドックで塗装や運搬の仕事をしていたために、塗装はすべて自分でおこなっていた。」(Su家住宅、1907(明治40)年建設、弥生町)

住民単独ではその多くが家の主人である(9例)。中には港湾地域の性格を反映して船舶関係の塗装経験者、塗料店経営者や大工の経験者、写真を趣味にしている人といった、塗装や色彩に対して専門的知識をもつ人もいる。

「色の選択等はすべて塗装業者に任せた。」(Iw家住宅、1924(大正13)年頃建設、弥生町)、「現在の塗装は、自転車に乗って巡ってきた塗装業者に依頼した。」(Ha理容院、1909(明治42)年建設、大町)

塗装業者主体では、住民がペンキ色彩の専門家として塗装業者を全面的に信頼し、いっさいをまかせている。中には自転車などで地区を巡回してきた塗装業者に依頼する例もみられた(3例)。塗装業者の地区の巡回は営業が主目的だと思われるが、ペンキが剥げ落ちたり傷んだりしている建物を見つけ、その所有者に対してペンキの補修を助言することをおこなっていたものと推測される。いわば、塗装業者は町並みの観察者、管理者(タウンウォッチャー)としての役割を担っていたのではないかと考えられる。

「色の選択等については、自分の好みをもとにして塗装業者と相談しながら決めた。」(喫茶店Pe、1907(明治40)年建設、大町)、「ピンクの塗装は塗装業者に『あたらしさを表現するものはないか』と相談したところ、あげられたものだった。」(Ta湯、1928(昭和3)年建設、弥生町)

住民と塗装業者の対話では、住民が自分の好み、イメージ、要望を塗装業者に伝え、塗装業者と相談しながら色を決めている。こ

での塗装業者はペンキ色彩の相談役、アドバイザーとしての役割を果たしている。

「現在の塗装は5年ほど前のもので、色の選択については向かいのYa宅と相談して同時におこなった。(これまでも同様のことを何度かおこなっている)」(Ha家住宅、1907(明治40)年建設、弁天町)

住民同士の相談では、色について近隣と相談し、塗装も同時におこなうなど、一連のペンキ塗り替えを共同作業としておこなっている例がみられた。

以上を関係図として示したのが図3である。色彩選択における意志決定においては、住民と塗装業者の対話や住民と近隣の相談のように、他者との相談システムが成立しているケースがみられた。また、塗装業者の関与が比較的多くみられ、その役割が大きかったと考えられる。しかし、「最近ではペンキ塗装の塗り替えよりも、外壁のほりかえを勧めに来る業者がある」(Ta家住宅、1932(昭和7)年建設、大町)ように、ペンキ塗装にかかわるかつての塗装業者との関係は変質しつつあるといえる。

5. 色彩選択の決定要因

どのような考え方や理由で個々の建物のペンキの色が決められたのかは、町並み色彩形成にとって重要である。住民の色彩選択の決定要因には様々なものがあるが、建物や周囲の環境との関係への対応によって、関係への考慮が全くみられないものと、何がしかの考慮がみられるものの大きく2つのタイプがある。前者は西部地区の町並み色彩とは無関係に、住民個人の思いつき、その時の気分といった恣意的要素で色を選択している「個人恣意型」、後者は自分の建物との関係を考慮した「建物価値型」と地区の周辺環境との関係を考慮した「町並み型」にさらに分けられる(表5)。

「色の選択などについては、これといったポイントもなく、その時の気分で選んでいたのではないか。」(民宿Ky、1914(大正3)年建設、弁天町)

個人恣意型は、住民の独善に陥る可能性があるが、このタイプは2例と少ない。

建物価値型は、自分の建物へのこだわりや愛着を色彩で表現したもののといえ、21例と最も多い。このタイプでは、その表現の仕方によって以下の5つがみられた。

「色はそれまでのものにあわせて濃いクリーム系の色を選んだ。その他、5年ほど前に塗り替え現在にいたっている。その時にも前回と同様、それまでと似かよった色を塗装することを希望した。」(Sa電機商会、1907(明治40)年建設、大町)

一つは、下見板張りペンキ塗装の洋風建物の現状の維持・保全や過

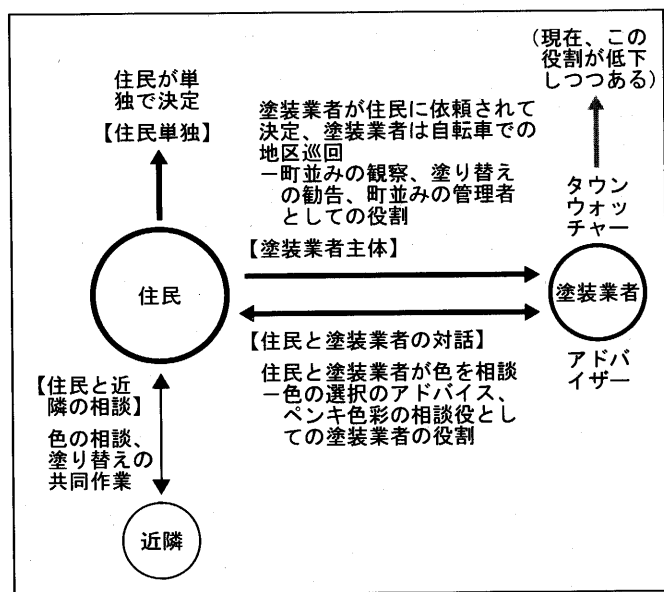


図3 色彩選択における意志決定の主体と方法

表5 色彩選択の決定要因

タイプ	各タイプの内容	具体的内容	該当数
個人恣意型	住民個人の恣意により色を選択	個人の思いつき、気分で選択	2
建物価値型	自分の建物との関係を考慮して色を選択	建物の時間的連続性を考慮 建物意匠の色彩効果を考慮 建物の外壁と屋根の調和を考慮 建物の用途や家族のイメージを表現 色ムラや汚れの手直し	7 4 2 6 2
町並み型	周囲の環境との関係を考慮して色を選択	周囲の建物との関係を考慮 港の場所のイメージを表現 地区の代表的建物の色を参考、採用 地区全体の流行色を採用	4 2 4 3
合計			36

去の色の再現をはかるなど、建物の時間的連続性を考慮したものがあげられる（7例）。

「柱型の白は建物を大きく見せる効果を狙ったものである。」（Ha 文化服装学院、1921(大正10)年建設、元町)、「窓などの塗り分けは外壁と同系色でそれより濃い目のものを用いるようにしている。」（Mu 船具店、1909(明治42)年建設、大町)

二つ目は、柱型や窓枠など建物がもつ意匠的な性格を背景に、色の心理効果の適用をはかったり、窓などの塗り分けを外壁と同系色で濃い目の色を用いてメリハリをつけるなど、建物に対する色彩効果の具体的なねらいをもって色を選択しているものである（4例）。

「色については屋根の色との調和を考えながら。」（32Fu 米穀店、1917(大正6)年建設、未広町)

三つ目は、屋根の色との調和、建物全体の調和を考慮したものである（2例）。

「理容院としてモダンなイメージを表現するものを選んだ。」（Ha 理容院、1909(明治42)年建設、大町)、「外壁の色彩については、娘がいるのでピンク等かわいらしい色を選択してきた。」（Su 家住宅、1907(明治40)年建設、弥生町)

四つ目は、建物の用途や家族、とくに子どもにふさわしいイメージを表現する色を選択したものである（6例）。

「明るい黄色から段々暗くして下の色のムラや汚れが消えるようにした。」（Ki 商店、1913(大正2)年建設、大町)

五つ目は、現状の建物の問題として色ムラや汚れがあり、それを解決するためにペンキの色相、明暗、濃さを考慮したものである（2例）。

町並み型は、周囲の環境に対する関心と理解にもとづき、その環境との適切な関係を築くことをめざしたものといえ、13例みられた。このタイプでは、対象とする環境のちがいににより以下の4つがみられた。

「現在の色彩は7、8年前に塗装したもので隣の家と色をあわせて選んだ。」（En クリーニング、1946(昭和21)年建設、未広町)

一つは、隣家と同じ色を選んだり、周囲の建物の色を参考にして色を選んだものである（4例）。

「みなとをイメージする明るい色彩としてその色を選んだ。」（He 石油事務所、1907(明治40)年建設、未広町)

二つ目は、建物が港に面するところに立地しており、その場所のイメージを色で表現しようとしたものである（2例）。

「そのときの流行色を取り入れるようにしている。」（Mu 船具店、1909(明治42)年建設、大町)

三つ目と四つ目は、時代によって地区の流行色があり、それを採用したものと（3例）、3-3で述べたように、旧函館区公会堂や相馬株式会社などの西部地区のランドマーク的な建物のピンク色や緑色を参考にし、それを取り入れたもの（4例）である。

表6 色彩選択における決定要因と意志決定の主体・方法

色彩選択の決定要因 タイプ	個人 恣意 型	建物 価値 型	町並み 型	不明	合計
意志決定の主体・方法					
住民単独	1	6	2	6	15
塗装業者主体	0	4	3	4	11
住民と塗装業者との対話	0	5	2	1	8
住民同士の相談	0	0	0	1	1
不明	1	6	6	0	13
合計	2	21	13	12	48

数値は該当数を示す。なお、住民単独は11例、塗装業者主体は9例、住民と塗装業者との対話は5例であるが、それぞれ色彩選択の決定要因は複数のタイプに該当する例があるため、合計数が増えている。

この色彩選択における決定要因と、4の意志決定の主体と方法の関係を示したのが表6である。色彩選択の決定要因からみると、個人恣意型は2例しかなく、多くは建物価値型、町並み型（両方合わせて34例の71%）で占められている。建物価値型とは、函館市西部地区の町並みの中で、洋風建物の柱型や窓枠等の意匠の特徴、外壁と屋根の関係、歴史的町並みとしての時間的連続性、建物の用途のモダンイメージなど、建物の特質との関係を考慮して色彩を決定したタイプである。町並み型とは、隣家や周囲の建物の色彩を参考にして色を選び調和をはかったもの、港周辺に立地するものが港のイメージにつながる色彩を選んだもの、地区のランドマーク的な建物の色彩を取り入れたり、地区で流行していた色彩を取り入れたものなど、近隣や地区への関心のなかで、環境や町並みとの関係性から色彩選択したタイプである。この建物価値型、町並み型が多くを占めることに、西部地区の町並み色彩の特徴が継承されてきた大きな要因があるといえる。

次に意志決定の主体、方法をみると、専門家である塗装業者が関与しているケース（塗装業者主体と、住民と塗装業者との対話の両方合わせて19例の40%）が最も多い。この場合、色彩選択の決定要因は建物価値型と町並み型しかなく、町並み色彩形成における塗装業者の関与の重要性が浮かびあがる。塗装業者は、営業も兼ねてであろうが、自転車ですべて地区を巡回してタウンウォッチャーや色彩アドバイザーとして西部地区の暮らしのなかに定着していた時代のあったことがヒアリングからうかがえる。また住民が他に相談せず単独で決定したケースも多いタイプ（15例の31%）となっているが、この場合でも色彩選択の決定要因には建物価値型をあげたものが多い。住民が、西部地区の町並みのなかでの建物の意匠の特徴などに対する理解と関心をもち、それを手がかりに色彩選択していることがうかがえる。また1例のみであるが、住民同士の相談で色彩選択した事例もあり、近隣コミュニティとの関係性もみられる。

6. 町並み色彩形成のしくみ

函館市西部地区において、変化と多様の中で一定の調和をたもつ町並み色彩の特質の基底にあるものとして、ペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりに着目し、分析してきた。建物や周囲の環境のペンキ色彩に対する住民の記憶の分析から、住民は数多くの思い出を語り、ペンキ色彩を鮮明に記憶していることがわかった。その記憶は様々な、具体的な生活のエピソードと結びつけられていた。生活の節目となる重要な出来事にペンキ色彩がかかわっていたことなど、住民にとって町並み色彩が暮らしの中で意味をもち、重要な役割を担っていたことがうかがえる。地区の特徴的な町並み色彩であるピンク色と緑色の記憶から、ランドマーク的な建物に塗装されたそれらの色が、その周辺や近隣の住民に評価され、あるエリア内で連鎖的に模倣されて広がり、流行するという、隣接波及の現象がとらえられた。これは、住民の暮らしとのかかわりの中で町並み色彩が形成されてきた一つの具体例である。また、ペンキを塗り替える時の色彩選択の意志決定の主体、方法と決定要因の分析から、住民と塗装業者、近隣住民との間の対話、相談という、地域コミュニティにおける色彩選択の支援的なしくみをもっていることがわかった。さらに、洋風建物の柱型や窓枠等の意匠の特徴、外壁と屋根の関係などを考慮したり、隣家や周囲の建物の色彩を参考にしたり、港のイメ

ージを考慮したり、地区のランドマーク的な建物の色彩や地区で流行していた色彩を参考にするなど、住民の色彩選択決定要因には、建物との関係を考慮した建物価値型と周囲の環境との関係を考慮した町並み型のタイプが多くを占めていた。このようなペンキ色彩と住民の暮らしのかかわりの分析から見出された、住民のペンキ色彩への鮮明な記憶、生活のエピソードと結びついたペンキ色彩の思い出、隣接波及にみられるような近隣の建物や環境の影響、評価、塗装業者や近隣住民の支援、建物価値型と町並み型の色彩選択のあり方などが、建物のペンキの塗り替え時に、相互に関係をもちながら作用し、それが地区の町並み色彩形成のしくみとして働いていたのではないかと考えられる。そこに町並み色彩が変化と多様の中で一定の調和をたもっている理由があるといえる。

この函館市西部地区における町並み色彩形成のしくみをモデル化すると(図4)、①住民は建物の維持管理のために5年から10年の周期でペンキ塗装をおこなう、②その際の色彩選択の決定要因は様々であるが、住民の多くが建物価値型や町並み型といった、建物や周囲の環境との関係の中で色を決定している、③その背景には、ペンキ塗装が単なる建物の保護ということだけでなく、住民の暮らしの場面と関係づけられ、生活レベルで様々な意味をもち、それが住民の思い出として記憶に残されているため、④ペンキ塗装という周期的な行為の時に塗装業者や近隣を媒介にして、住民が建物の意匠的特徴や周囲の環境と対面し、その特質に気づき、価値を再評価し、⑤これらを通じて色彩選択と外壁等のペンキ塗り替えをおこない、⑥その結果が周辺で評価されたり、地区の町並み色彩に影響を及ぼしたりして、⑦地区全体としての町並み色彩の特質が形成され、それがまた次の色彩選択に生かされる、という循環する関係性の構造として描くことができる。

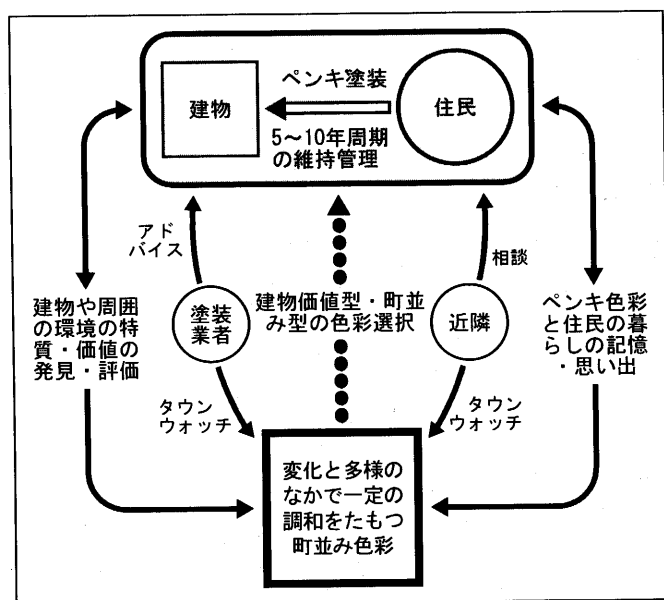


図4 町並み色彩形成のしくみのモデル

7. おわりに

函館市西部地区は、下見板張り洋風建物のペンキ塗装の町並みが形成され、時代の移り変わりの中で、その町並み色彩が変化し多様さをもちながら、一定の調和をたもっているところにその特質があ

る。この独特の町並み色彩が歴史的に形成されてきたしくみは、住民による建物へのペンキ塗装を通じて、住民と色彩選択のあり方、塗装業者や近隣の支援体制、建物や周囲の環境の特質・価値とその理解・評価、ペンキ塗装と住民の暮らしの結びつき、その思い出・記憶などが相互に関係づけられた構造にあることをあきらかにした。この建物維持管理のための住民によるペンキ塗装の生活行為を中心とした、関係性の構造をどのように継承していくかが西部地区の町並み色彩計画の課題である。近年、下見板張り洋風建物の減少など物理的環境の変化や、住民と塗装業者との関係の変質などにより、ペンキ塗装の生活行為そのものが減少傾向にあるが、一方では、この10年ほど市民ボランティアによるペンキ塗りワークショップがおこなわれるなど、関係性の構造を継承する動きもみられ、今後の動向が注目される。

謝辞

本研究のヒアリング調査・整理の大部分をおこなってくれた当時の北海道大学学生の巽裕樹氏、また本研究のご指導をいただいた故足達富士夫・北海道大学名誉教授、眞嶋二郎・北海道大学名誉教授、調査にご協力いただいた建物所有者の方々、石塚雅明氏、元町倶楽部・函館の色彩文化を考える会のメンバーの方々に深く感謝の意を表します。

参考文献

- 森下満ほか3名：函館市西部地区のペンキ色彩からみた町並みの変容—下見板張り洋風建物ペンキ層の「時層色環」分析を中心として—、日本建築学会計画系論文第579号、pp81-88、2004.5
- 公共の色彩を考える会 編 「まちの色彩作法「提言集」、都市文化社、1994
- 嘉田由紀子 著 「生活世界の環境学—琵琶湖からのメッセージ」、社団法人農山漁村文化協会、1995
- 中野卓・桜井厚 編 「ライフヒストリーの社会学」、株式会社弘文堂、1995
- 間場寿一 編 「地方文化の社会学」、世界思想社、1998、の中の、小林多寿子：第11章 ライフヒストリーのなかの地域、pp244-266
- 巽裕樹 著 平成2年度北海道大学工学部建築工学科住居地計画学講座卒業論文「函館・西部地区のまちなみ色彩の変遷と色彩形成のしくみに関する研究」、1991
- 函館市教育委員会 編 「函館市西部地区の町並 元町・末広町地区伝統的建造物群調査報告」、函館市、1983
- 函館市教育委員会 編 「函館市西部地区の町並 芥田町・弥生町地区伝統的建造物群調査報告」、函館市、1984
- 財団法人文化財建造物保存技術協会 編 「重要文化財 旧函館区公会堂保存修理工事報告書」、函館市、1983

注

- 注1) 時層色環とは、下見板張り洋風建物の表面のペンキ塗膜の下に塗り重ねられた古いペンキ層の発掘調査（外壁下見板や窓枠等の屋外木部のペンキ塗膜を紙やすりで円環状にこすり、木の地が出るまで削る、これを「こすり出し」という）の結果、ペンキ層の色が同心円状の模様となつてあらわれたものをいう。参考文献1)のpp81-82を参照。
- 注2) 参考文献1)掲載の図2(p82)、図3(p85)および参考文献6)を参照。
- 注3) 参考文献7)によれば、1878(明治11)年焼失戸数954戸、1879(明治12)年焼失戸数2,245戸、1896(明治29)年焼失戸数2,280戸、1907(明治40)年焼失戸数12,390戸、1921(大正10)年、1934昭和9)年焼失戸数22,667戸、があげられている。
- 注4) 外壁と窓枠・柱型等の時層色環から得られた各ペンキ層を色票で示し、それを塗り始めから調査時点の最新層まで時系列に並べ、筆者らが開発した時層色環の分析手法を用いて、外壁ペンキ層の各色の塗装年の特定・推定をおこなった、調査対象建物82棟ごとのデータ票。参考文献1)の図3(p85)を参照。
- 注5) 参考文献1)のp83を参照。
- 注6) 1937年に公布された防空法にもとづき、重要な建物や公共的な建物等は偽装、迷彩が義務づけられていた。参考文献1)のp87を参照。
- 注7) 参考文献1)のp87を参照。
- 注8) 函館文化服装学院は、参考文献8)の歴史的建造物リストに掲載された85件のうちのひとつである。なお、筆者らが時層色環の調査をおこなった直後の1988年5月に取り壊され、現存していない。
- 注9) 参考文献9)の「第五節 細部の調査と修理」の「12 塗装」(pp259-260)に詳述されている。
- 注10) 参考文献1)のp87を参照。

(2004年11月10日原稿受理、2005年3月14日採用決定)